

初習言語 A (初級) とヨーロッパ言語共通参照枠

—ドイツ語・フランス語を例に—

A Report on the Students' Achievements in the German and French Beginner Classes Referring to the CEFR Standards

佐藤文彦 三上純子

Sato, Fumihiko Mikami, Junko

Abstract

In the system of the second foreign language learning at Kanazawa University, beginners are required to take two lessons each week. One lesson focuses on grammar and the other gives stress on oral-communication skills. In this paper, we report on the students' levels of achievement in the oral-communication classes of German and French based on the can-do lists of the CEFR level A1. We also analyze some problems in the course design at the university which make it difficult for the students to follow the successive learning steps shown in the CEFR, and give our opinions about the possibilities for improving language teaching at the university focusing on competency development necessary for communication.

1. はじめに

2010 年度より、外国語教育研究センターの共同研究プロジェクト A では、金沢大学の共通教育言語科目における到達目標と厳正な成績評価の実現に向けた取り組みとして、ヨーロッパ言語共通参照枠（以下、CEFR と略称）を到達目標として活用する試みに取り組んできた。すでに英語では、英語 I の履修者に CEFR のレベルに照らし合わせた英語力自己判断アンケート調査を行っている。

大学入学後に学習を開始する初習言語については、1 年次に A (初級) の履修者が目指すレベルは CEFR A1 である。履修者に対してより詳細なコミュニケーション能力の自己判断アンケートを行う場合には、きわめて具体的な can-do 項目の例示が必要になる。そこで初習言語の方では、ドイツ語とフランス語を例にとり、1 年次の A の授業で CEFR の A1 のどの程度の can-do 項目が扱われているかを調査してみることにした。以下に示すのは、本学で使用されている CEFR に対応した教科書を分析して得られた、1 年間で到達可能と思われる can-do 項目の目安である。本稿では、さらに本学のカリキュラムと CEFR のレベル設定の間にある問題点を整理し、今後の授業運営やカリキュラムの改善の可能性について検討したい。¹

¹ この原稿は 2012 年 1 月 31 日に外国語教育研究センターの研究会で報告した内容に加筆修正を加えたものである。

2. 初習言語 A の授業システムと CEFR

本学における初習言語 A（ドイツ語・フランス語・ロシア語・中国語・朝鮮語・スペイン語）は、最初の学期に A1 と A2 が、次の学期に A3 と A4 が、それぞれペアで開講されている。いずれも 90 分週 1 回、全 15 回からなり、たとえば 1 年次にドイツ語を初習言語として選択した学生は、前期に週 2 回、A1 と A2 の 2 コマを履修する。そしてそれぞれの科目で単位を取得できれば、後期には A1 に接続する A3 と A2 に接続する A4 を受講することになる。なお、成績評価（単位認定）は A1 と A2、A3 と A4 で別に行っている。

初習言語 A が必修か選択かは学類によって異なるが、基本的にすべての学生にペアでの履修が推奨されている。したがって選択コースでも A1 と A2（A3 と A4）はセットで開講されるのが原則である。

2-1. ドイツ語 A の場合

2011 年度前期に開講されたドイツ語 A は、必修コース 10 ペア、選択コース 3 ペア、半期遅れコース 1 ペアの計 28 コマだった。半期遅れコースとは、前年度（2010 年度）後期開講の A1 と A2 から学習を始めた者の継続クラス（A3 と A4）であり、対象学生も 2 年生以上に限定されるため、この年に入学した 1 年生向けのドイツ語 A の授業としては、A1 と A2 がそれぞれ 13 コマ、つまり 13 ペア提供されたことになる。

A1 と A2 を同一の教員が担当する、いわゆる「ひとりペア授業」も一部のクラスでは実施されているが、多くのペア授業は A1 と A2 を別の教員が担当している。その際、A1 は文法の授業を中心に行い、A2 はコミュニケーション活動を重視する、という大まかな了解はあるものの、実際の授業運営は各担当教員の裁量にゆだねられている。

使用する教材（教科書）もまた、クラスによって大きく異なる。たとえばこの学期、13 クラスある A1 の授業で採用された教科書は 11 種類。それ以外に、市販の教科書は使用せず、手作り教材で授業を行うクラスも 1 つあった。日本の出版社が発売するドイツ語文法の教科書は、各課に文法説明と（独文和訳・和文独訳などの）練習問題を配置した画一的な構成を取っていることが多い。そしてこれらの教科書は、いずれも週 1 回の授業で 1 年間使用されることによって初級文法をひと通り終わらせることをうたっている。1 格の人称代名詞と動詞の現在人称変化に始まり、関係代名詞や受動態、さらに接続法までも初年次に教授したその先に想定される学習とは、独和辞典の助けを借りながらの原書講読であろう。これまで明確に意識化されることはなかったが、本学のドイツ語 A1/A3 もまた、このような日本の大学における従来型の初級ドイツ語教育に追随して展開されてきた。このことは行動中心主義をうたう CEFR の理念と相容れないことと同義である。したがって本学のドイツ語 A と CEFR について考えるとき、文法中心の A1/A3 よりむしろ参考となりうるのは、コミュニケーション活動に力点を置いた A2/A4 の授業ということになる。

この学期、13 クラスある A2 の授業で採用された教科書は 6 種類（その他、市販の教科

書は使用せず、手作り教材で授業を行うクラスも 1 つあり)。この数は A1 の 11 種類にくらべやや少ない。その理由として、A2 の授業を数多く担当するネイティブ教員が複数のクラスで同一教科書を用いた点が挙げられる。さらに 2011 年度から、2 年次以降もドイツ語を継続して学習する機会の多い人文学類・国際学類の 4 クラス中 3 クラスにおいて、ドイツの出版社から刊行されているシリーズ化された教科書（具体的には Hueber 社の *TANGRAM aktuell*）を準統一教科書として採用した事実も考えられよう。

2004 年に初版が発売された *TANGRAM aktuell* シリーズは CEFR に準拠して作られた教科書である。本学の A2 クラスで採用された *TANGRAM aktuell 1 Lek. 1-4* はシリーズ最初の巻であり、CEFR A1 の前半部に相当する。また、シリーズ第 2 巻の *TANGRAM aktuell 1 Lek. 5-8* は CEFR A1 の後半部に対応しており、これら 2 冊を終えてはじめて CEFR A1 レベル到達ということになる。*TANGRAM aktuell* シリーズは各巻とも 50-80 Unterrichtsseinheiten の授業時間を想定して作られているので、² 1 回の授業が 90 分の本学の場合、Lek. 1-4 を終えるのに 25~40 回の授業回数が必要となる。事実、この教科書を使用した教員によると、前期の A2 (全 15 回) では終えられず、後期の A4 (全 15 回) を含めた計 30 回の授業で 1 冊を終えたという。³

他に A2 で使われた教科書のうち、CEFR A1 レベルに準拠したものとしては『スタート！—コミュニケーション活動で学ぶドイツ語—』（三修社、2009）が挙げられる。この教科書もまた 90 分の授業で週 2 回の使用によって 1 年間で終わられることを想定して作られている。⁴ したがって本学のように週 1 回、A2 および A4 の授業だけで用いた場合、1 年間の授業では全 10 課中、半分強の第 6 課までしか進まない、この教科書を使用している教員から報告をいただいた。

その他の A2 の教科書としては、総合教材とまではいえなくとも、会話および読解のテキストにビデオ (DVD) や音声教材を組み合わせたものが目を引く。しかし日本で刊行されたこれらの教科書は、CEFR 準拠をうたっているわけではなく、したがって週 1 回の文法の授業の進度に合わせ、1 年間で相当レベルの会話練習（たとえば関係文や受動態を用いたもの）を視野に入れている。こういった文法項目は、当然のことながら CEFR A1 に準拠した教科書を 1 冊終えたところで扱われるものではない。

このように、CEFR に準拠した教科書を用いた A2 のクラスとそうでないクラスでは、同様にコミュニケーション能力の向上を図りながらも、到達目標の設定は大きく異なる。加えて後者では、到達目標をいわゆる can-do 記述文で表すことがないため、ひとつの会話練習がどのようなコミュニケーション能力の習得を目指して行われているのか、判断に窮す

² Ina Alke, Rosa-Maria Dallapiazza, Eduard von Jan u. Diter Maenner: *TANGRAM aktuelle 1 Lek. 1-4 Lehrerhanduch*. Ismaning (Hueber) 2005, S. VII

³ 本学では *TANGRAM aktuell 1 Lek. 5-8* を 2 年次以降のドイツ語 B および C (専門科目としてはドイツ語コミュニケーション 1 および 2A・2B) で継続使用している。

⁴ 藤原三枝子、桂木忍ほか：『スタート！—コミュニケーション活動で学ぶドイツ語—』教授用資料、三修社、2009 年、13 ページ。

ることもままある。『スタート!』についても、目次に記載されている各課の「言語行為」が can-do 記述の形を取っていないため、CEFR 準拠というよりむしろ、「CEFR の影響を受けてドイツ本国でできた A1 レベルの試験に合格することを目標として作られた感がある」との指摘がある。⁵ いずれにしても、これまで本学のドイツ語 A の授業システムによってもたらされる学習の到達度を CEFR に照らし合わせて検討する試みはなされたことはない。

2-2. フランス語 A の場合

2011 年度に開講されたフランス語 A の授業は 30 コマで、内訳は必修コース 4 ペア、選択コース 2 ペア、半期遅れコース 1 ペアおよび A1 と A3 各 1 コマであった。

内容的には A1/A3 が文法中心、A2/A4 がコミュニケーション活動中心の授業である。担当については、A1 と A2、A3 と A4 がペア開講されている場合には、2 名の担当者がペアを組む形式を取っている。

教科書の選択は教員の個人裁量に任されており、学類別のコース内での統一も図られていない。A1 と A2、A3 と A4 で共通の教科書を使うことはしておらず、2011 年度もすべてのペアにおいて異なる教科書を使用している。

以下に参考までに、2011 年度の使用教科書を示す。A1/A3 の教科書は 5 種類である。文法中心の 3 種類は、『ことばのしくみフランス語』（白水社、2004）、『初級フランス語文法』（朝日出版社、2007）、『マ・グラメール』（白水社、2011）であり、総合教科書タイプの 2 種類は、『グラメール・アクティブ』（朝日出版社、2010）、『サンファッソン』（朝日出版社、2007）である。話し手が伝えたい内容から出発して文法という表現手段を学ぶという独自の метод論をもつもの、ポートフォリオや文化的な情報を多く取り入れたものなどがあるが、文法項目から見ると、順序は別にして、概ね週 1 回 1 年の授業で条件法や接続法までを網羅的に学ぶ形式の教科書と言える。これらの文法主導型の教科書を用いた授業では、学ぶべき学習項目に追われ、個々の文法事項をコミュニケーション場面で使いこなす練習は十分には行われていない。したがって、A1/A3 の達成度を CEFR の can-do 記述文に照らし合わせて測ることには無理がある。

A2/A4 の教科書の方は 4 種類で、*Conversation et Grammaire*（アルマ出版、2007）、*Nouveau Taxi! 1*（Hachette, 2009）、『フランス語 2020』（白水社、2011）、『フランス語の方法』（駿河台出版社、2010）である。このうちネイティブ教員が使用している *Nouveau Taxi! 1* のみが、DELF A1 という CEFR A1 に対応した資格試験を目指す教科書であることを明記している。ネイティブ教員は、この教科書を 1 年次の A2 と A4、それに続く 2 年次前期の B および後期の C と通して使い、⁶ 週 1 回の授業で 2 年かけて終えている。練習問

⁵ 平高史也：「日本における『ヨーロッパ言語共通参照枠』の受容—ドイツ語教育と日本語教育を例に一」、*Revue japonaise de didactique du français* Vol.6 n° 1、2011 年、276 ページ。

⁶ これらの B・C は専門科目としてはフランス語演習（聞く・話す）A および B として開

題帳も付いた *Nouveau Taxi ! 1* は日本で刊行されている教科書にくらべて分量が多い(144 ページ) からである。

また、フランスで作成された CEFR 準拠の教科書の内容をこなすのに時間がかかる理由としては、実際にフランスで行動できることを目標にしているのも、道案内や買い物の際の生活文化的な説明が詳しい、会話が自然で録音のスピードも速いため、聴き取りの難易度が高いといった理由も挙げられる。ただし、文法項目については、上記の文法の教科書にくらべてかなり限定されており、ゆっくりと練習しながら進むという方針が窺える。

なお、文法中心の教科書とコミュニケーション活動に重点を置いた教科書を比較すると、日本で刊行されている教科書も含めて、一般に後者の方が文法項目を絞り込んでいる傾向がある。だが先に挙げた A2/A4 の教科書のうち 1 種類は文法の授業でも使える作りの教科書であるため、A1/A3 の教科書と同等の文法項目を含んでいた。また、他の 2 種類も少なくとも過去時制(直説法複合過去形や直説法半過去形)までは扱っている。

コミュニケーション目標については、A2/A4 で使用されているすべての教科書において、目次に各レッスンで学ぶ「言語行為」が提示されている。その意味では、今後、CEFR の can-do 記述文を参照しつつ、授業内容の検討を行いやすいのは A2/A4 の授業と言えるであろう。

3. CEFR A1 レベルに準拠した教科書を用いた場合に到達可能な can-do 項目案

以上のような現状を踏まえ、われわれは本学のドイツ語およびフランス語 A の到達度について、CEFR に準拠した教科書を用いて授業実践が行われている A2/A4 のクラスをもとに can-do 記述文によって整理することを試みた。その際、CEFR A1 レベルまでの到達度をより正確に表現するため、これを細分化する方策を取った。

今回の調査に当たり、ドイツ語では *Tangram aktuell 1 Lek. 1-4* と『スタート!』を、フランス語では *Nouveau Taxi ! 1* に加えて、ネイティブ教員が使用した経験のある CEFR 準拠の教科書 *Spirale* (ピアソン・エデュケーション、Hachette, 2006) を分析対象とした。また CEFR のフランス語における到達目標については、*Référentiel de programmes pour l'Alliance Française élaboré à partir du Cadre européen commun* (Alliance Française, CLE International, 2009) も参照した。

A1 レベルの can-do 記述文を細分化するに当たり、われわれはまず、以下の 3 点から分類を行った。

- 1) 週 1 回の授業で 1 年間で到達可能な事項
- 2) 週 1 回の授業では(進度や教科書の配列などによって)到達が可能かもしれない事項
- 3) 週 1 回の授業では到達が困難な事項

講されている。

そしてそれぞれの事項について、各教科書で扱われている具体的な活動例を抽出し、それらを整理した。その結果できあがったのが別表 1 である。

「到達可能な事項」の多くは、検討した教科書の前半部分で扱われるものであり、ドイツ語・フランス語の別は問わず、CEFR にとって必須の習熟目標であると言えよう。とはいえこれらは CEFR に準拠した教科書を使わなくとも、会話の授業では必ず扱われる事項でもある。が、少し詳しく見ていくと、たとえば自己紹介に際し自分の氏名などの「アルファベットのつづりが言える」という can-do 記述や、住所・氏名を「申し込み用紙・ホテルの宿帳・住民登録票など」に記入するといったオーセンティックな活動例は、CEFR 準拠をうたった教科書ならではの実践的な言語使用であると考えられる。

次に「到達が可能なかもしれない事項」については、週 1 回の授業であっても、これらの一部は学習されるし、「到達可能な事項」との組み合わせによって（たとえば自己紹介に関する手紙やメールの作文など）到達がじゅうぶん見込まれるものも含まれている。また、「提案や依頼を承諾／拒絶」するに際し、単に肯定または否定の意志表示をするのではなく、前者なら喜びの、後者なら遺憾の気持ちを表す語句を付け加えて返答する会話練習などは、コミュニケーション手段としての言語使用を念頭に置く CEFR らしさの表れと言えよう。

他方、週 1 回の授業では 1 年かけても「過去の行動について表現できる」には「到達が困難」であった。この事実からは、A1/A3 の文法の授業と比較した時、会話の授業の到達度はかなり劣っていると言わざるを得ない。そしてそのことは、書くこと全般の到達度の低さにも直結する。今回のわれわれの分析対象は A2/A4 の会話の授業だったが、初級文法の総ざらいが半ばノルマと化している A1/A3 の授業では自由作文の練習を行う時間的余裕はなく、したがって A2/A4 の授業で四技能すべての向上が期待されているのが現実である。1 年間、初習言語を学んだ学生が過去形や現在完了形を用いて「旅先からのハガキやメール」を書けないということは、結果的に「申し込み用紙・ホテルの宿帳・住民登録票」といった所定の書式に書き込むことおよび自己紹介や簡単な近況報告しか書くことができないということを意味している。CEFR に準拠した教科書を週 1 回使用するだけでは、書くことの到達度は現在形の単文程度であることがわかった。

4. CEFR のレベル設定とカリキュラムのずれ

では次に、本学のカリキュラムと CEFR のレベル設定との間にあるずれの問題について整理しておきたい。ここまで見てきたように、ドイツやフランスで作成された CEFR A1 レベルに対応した教科書を週 1 コマの会話の授業で使用したのでは、1 年間では終えられない can-do 項目が出てくる。仮に週 2 回の授業で連携をとって使用すれば、1 年ですべての can-do 項目を終了することができるのだが、その場合は、共通教育と専門教育にまたがる問題が出てくる。

本学の A の履修システムにおいては、2 年次から初習言語を専門的に学ぶ学生も他の学生と同じ授業時間数であるため、これらの学生にとっては、講読を行うにあたり CEFR の

別表 1 : CEFR A1 レベルに準拠した教科書を用いた場合に到達可能な can-do 項目案

週 1 回の授業で 1 年間に到達可能な事項

コミュニケーション目標	具体的な活動例
挨拶ができる	おはよう、こんにちは、こんばんは、おやすみ、さようなら、バイバイ、元気?
お礼が言える、謝る	ありがとう、どういたしまして、ごめんなさい
自己紹介ができる	氏名、国籍 (出身地)、居住地、職業 (専攻)、話せる言語
アルファベットでつづりが言える	氏名の表記など
100 までの数字を用いた表現ができる	年齢、電話番号、番地など
身の回りのことについて表現できる	持ち物、家族について
好みについて表現できる	趣味や好きなもの (食べ物・飲み物・色など) について
空間の説明がわかる/できる	スーパーやデパートの配置・売り場 (フロア)、簡単な道案内など
人を描写することができる	外観・容姿、性格など
曜日が言える	1 週間の予定
簡単なカードに記入できる	申し込み用紙・ホテルの宿帳・住民登録票など

週 1 回の授業では (進度や教科書の配列などによって) 到達が可能なかもしれない事項

100 より大きい数字を用いた表現ができる	西暦、値段、人口など
身の回りのことについて表現できる	現住所、余暇や休暇の過ごし方、家族について
月の名前や季節が言える	誕生日など
簡単な買い物ができる	注文と支払い (チップ)、値段や量について話すなど
物を描写することができる	建物・部屋の様子の説明、買い物でのやりとりなど
時刻が言える・聴き取れる	乗り物の出発・到着時刻、日常生活の時間など
提案や依頼をすることができる	…を開けて・取って、…に来てくれますかなど (命令形・助動詞)
提案や依頼を承諾/拒絶できる	「もちろん」「喜んで」「残念だけど」などの表現も加えて
旅行の計画を立てることができる	列車の切符の予約、インフォメーションで尋ねる
簡単な手紙やメールを書くことができる	自己紹介や近況報告について

週 1 回の授業では到達が困難な事項

過去の行動について表現できる	旅先からのハガキやメール、休暇後のやりとりなど
将来の計画について表現できる	
意見を言うことができる	
天候を尋ねる/言うことができる	

A1 の文法知識だけでは不十分だという問題である。

先にも触れたように、A1 の文法の学習項目はかなり限られる。フランスの教育機関 Alliance Française が作成した CEFR の各レベル別の到達目標の目安によれば、A1 における動詞の法と時制の学習目標は直説法現在形、命令法の肯定形、条件法現在形（丁寧表現）であり、A2 で直説法複合過去形、半過去形、命令法（否定形を含む）、近接未来、近接過去、直説法単純未来形が加わる。また、初級文法で扱われることの多い、関係代名詞（qui, que, dont, où）や比較級・最上級、条件法・接続法の主要な用法が網羅的に到達目標として挙げられるのは B1 レベルである。付け加えておくと、従来、ドイツ語やフランス語の 1 年次の文法の授業で扱ってきた文法の学習項目はほぼこの B1 に相当する。英語で言えば大枠中学 1 年から高校 2 年までに学習する文法内容である。

さらに、読むことの到達目標に着目すると、現代文学の散文の読解は CEFR のレベル設定では B2 であり、C1 で文体やレジスターの違いが、C2 で修辭的な文彩が扱われることを考えると、大学 2 年次に初習言語の文学テキストを読むためには、読むことについては大変な速習が要求されることがわかる。現行のカリキュラムは十分とは言えないにしても、このような専門教育とのつながりを想定して作られたものである。そのため、A の段階における、受容行為のうちの読むことの到達目標（特に読むための文法知識の到達目標）が受容行為のうちの聞くことの到達目標や生産行為のうちの話すこと、書くことの到達目標にくらべて格段に高く設定されているのである。

さて CEFR の到達目標を大学の初習言語教育に活かすためにもう一つ問題となるのは、CEFR と日本国内の検定試験の性格の違いである。フランス語の検定試験、実用フランス語技能検定試験（以下、仏検と略称）を例にとると、100 時間の学習時間を目安にした 4 級レベルの到達項目には、動詞の主要な法と時制および比較級・最上級などが含まれている。現在、本学ではこの級の取得により A1～A4 までの単位を認定しているが、これが無理なく行えるのは、本学の初級の学習内容が仏検 4 級の到達目標と概ね重なるからである。

仏検を実施しているフランス語教育振興協会は、学習時間 200 時間を目安にした仏検 3 級を CEFR A1 対応の資格試験 DELF A1 とほぼ同一のレベルとする対応表を出しているが、文法の学習項目だけをとれば、仏検 3 級は CEFR の B1 レベルに相当するであろう。ただし、CEFR 対応の資格試験の場合、DELF A1 から実践的なタスクを課する性格を持つのに対し、仏検の方は文法知識を確認するという傾向が強いので、その難易度をくぐらべるのは容易ではない。

同様の問題はドイツ語技能検定試験（以下、独検と略称）にも当てはまる。現在、本学では 120 時間（90 分授業で 80 回）の学習時間を目安とした 3 級の取得により、A1～A4 までと B（1 科目）の計 10 単位を認定しているが、これは「ドイツ語の初級文法全般にわたる知識を前提に」した独検 3 級の検定基準が本学の初級の学習内容とほぼ合致し、さらに「簡単な内容のコラムや記事などの文章を読むことができる」ためには、ある程度の積み増し分 B（1 コマ）が必要であると判断したからである。なお、独検事務局は CEFR に

基づいたドイツ語検定試験とのレベル対照について公にはコメントしていない。しかし問題文の表記（日本語かドイツ語か）や口述試験の有無などからして、両者の試験のタイプが大きく異なるのは言うまでもない。

将来的にコミュニケーション能力を重視した CEFR のレベル設定を本学のカリキュラム設計の中に取り入れることを考える場合には、CEFR 対応の資格試験と仏検・独検の性格の違いおよび到達目標の隔たりについて、教員が十分に認識することが肝要である。

5. 今後の試みの可能性について

それでは、ここまで見て来た問題を踏まえて、本学の共通教育において、CEFR に明確に表れているようなコミュニケーション重視の言語教育の方向性をどのように活かすことができるであろうか。この点について、研究会当日に参加者からいただいた意見も参考にしながら、A1/A3 と A2/A4 に CEFR のレベルのずれを含んでいる現行のシステムを前提にした場合と、現行のシステムを超えた場合に分けて、その可能性を考えてみたい。

現行の履修システム内での可能性

- 1) 一部の学類の週 2 コマの授業に、今回紹介したような教科書を使ってみるのが考えられる。ただし、これらの教科書を使用しているネイティブ教員によると、ドイツやフランスで作成された教科書のリスニングは日本人初学者にとっては大変難しいとのことであった。人文学類や国際学類の学生には使えるかもしれないが、これらの学類には 2 年次以降、専門的な講読が必要となる学生が含まれている。また、このやり方を取ると同一レベルの授業に難易度の違いが出てくるので、その意味でも現行のシステムの中での実験にはやや慎重にならざるを得ない。
- 2) 本学では後期に必修の授業に加えて 2 コマの充実クラス（読む・書く／聞く・話す）を設けている。これらのクラスで CEFR A1 の can-do 項目により配慮した授業を行うことは可能であろう。
- 3) 担当者間で A1 の can-do 項目についての共通理解ができれば、現行の授業の中でできる工夫もある。例えば以下のような工夫である。
 - ・ A1/A3 の授業で、CEFR A1 レベルの最重要語彙を使えるように練習させる。
 - ・ A1/A3 の練習問題に実践的なものを多く取り入れる。
 - ・ すべての A2/A4 の授業で、A1.1 の can-do 項目と見なされる項目を修得させる。
 - ・ A2/A4 の授業で、A1.1 の can-do 項目と見なされる項目を修得させる。
 - ・ A2/A4 の授業では、授業の評価基準における文法的な正確さの割合を下げ、コミュニケーション目標に関わる評価の割合を高める。例えば、DELTA A1.1 の資格試験を念頭に置いた試験を行う。
- 4) 派遣留学で学生をドイツやフランスに送り出す時には、CEFR 対応の資格試験により語学能力を証明できると、相手大学の受け入れも円滑に進む。しかし、この種の資格試験

は受験料が高い上、金沢では試験が実施されていないため、学生にとっては受験しにくいのが現状である。そこで、ドイツ語・フランス語で実施している夏期の語学研修の際に、参加者のうち希望する者には研修終了後、現地で本人のレベルに合った資格試験を受験させるとよいと思われる。特に口頭試験は学生の留学へのモチベーションを高めるためにも効果的であろう。この点については、実現できるよう研修先の大学と交渉してゆきたい。

- 5) 本学の共通教育では外部試験による単位認定を行っているが、現在フランス語では仏検のみを対象としており、CEFR 対応の資格試験 DELF については単位を認定していない。先にも述べたように、仏検と DELF のレベル設定の整合性には注意する必要があるが、DELF の単位認定についても検討すべき時期に来ている。他方ドイツ語では、CEFR A1 レベルに対応した Goethe-Institut の検定試験 Start Deutsch 1 に合格すると A1~A4 の 8 単位を、A2 レベルに対応した Start Deutsch 2 に合格すると A1~A4 と B(2 科目)・C(2 科目) の計 16 単位を認定している。しかし上述の通り大学 1 年次に扱う文法項目は CEFR B1 レベルにまで相当するものであり、それより低位のレベルの合格で相当数の単位を認定している現状が妥当かどうかは再検討の余地がある。

現行の履修システムを超えた可能性

- 1) 現行の週 2 コマの授業以外に、週 3 コマ・4 コマのインテンシブコースを設け、CEFR A1 および A2 を 1 年次に終了することを目指す。しかし、非常勤の予算削減、各学期の履修登録単位数 24 単位以下のしぼり、さらに学類への進学の際に「経過選択制」という専門領域をゆっくり決めさせる制度をとっている本学の体制から見て、このようなコースの設置は難しいように思われる。
- 2) すべてのコースにおいて週 2 コマの初級の授業で CEFR A1 対応の教科書を使用し A1 を終了する。続けて B・C(人文学類・国際学類では専門科目)でも週 2 コマ A2 対応の教科書を使えば、2 年間でほぼ A2 まで終えることができる。この案を採用する場合は、一部の学生向けには、2 年次前期で専門書購読のための文法速習授業を準備する必要がある。将来、中等教育の英語教育および英語の大学入試が行動中心主義的な方向に変われば、本学の初習言語教育もこのような方向に進む可能性が出てくるかもしれない。万が一、中等教育から第二外国語が義務化されるようになれば、大学では A2 から始めて B1 までを視野に入れた学習が可能となる。この方式のメリットは、学習者が留学先の大学や生涯学習として語学学校などで学び続ける際に、連続性をもったカリキュラムで学べることである。

さて以上のように、CEFR 的なコミュニケーション能力を重視した外国語教育を本学のカリキュラムを前提に導入するのは、かなり難しいのが現状である。しかし、can-do 記述文に端的に示された実践能力の獲得を目標とする語学教育はグローバル化した世界にあっ

ては、当然の要請であろう。また学習者の立場に立てば、目標言語で行動できることを実感するとモチベーションが上がるという学習効果も期待できる。初習言語の担当者は、学習者がコミュニケーションの喜びを感じられるような語学教育を目指して努力を重ねるべきであろう。本稿の報告と検討が担当者間の建設的な議論に役立てば幸いである。